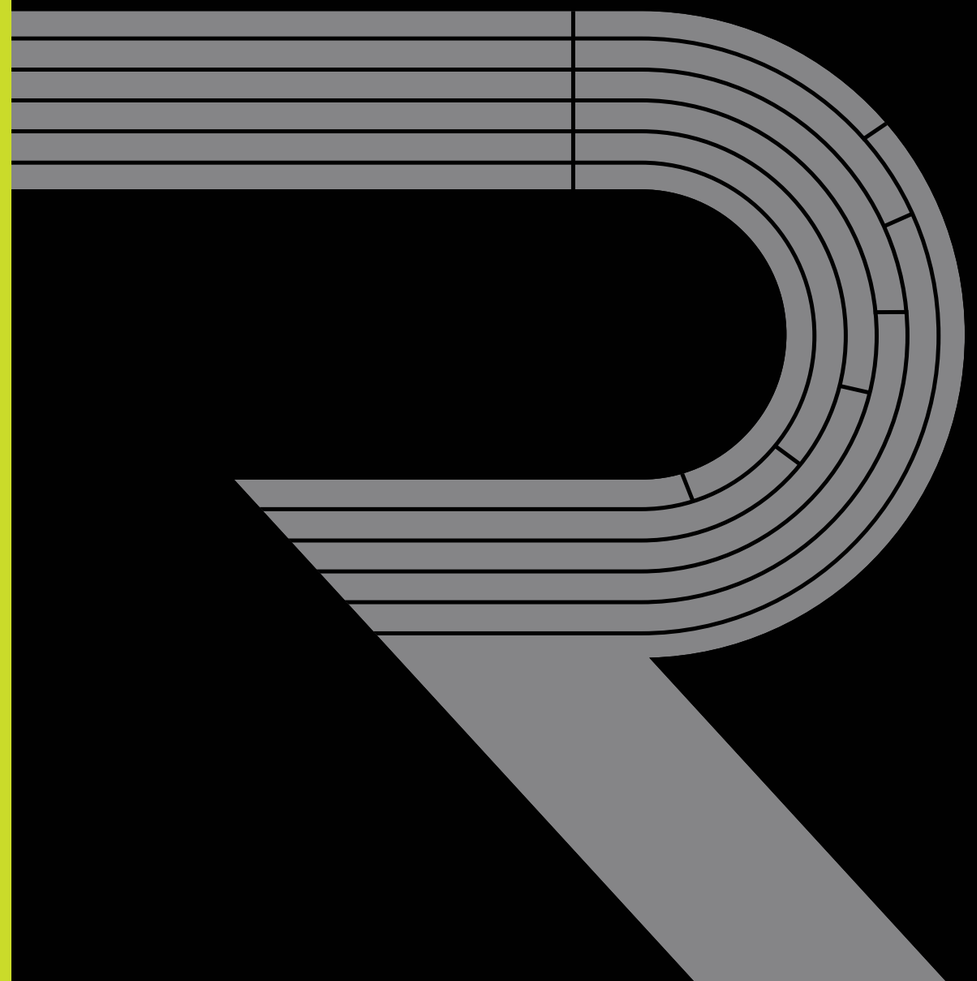
ISSN 2436-7834

JAAF 中長期計画 REFORM

新たなステージへの挑戦



JAAF
Japan Association of
Athletics Federations

Keep Challenging to the Next Stage

JAAF中長期計画 ── 新たなステージへの挑戦 ──

「陸上」を通じて、皆さんの生活がより豊かになるように、また多くの方に興味関心を持ってもらえるよう、本中長期計画を基に、多岐にわたる事業を展開しながら、新たなステージで挑戦をしていきます。

CONTENTS

JAAF VISION 2017 の具体化 …… 05
中長期計画の目指すもの～未来に輝く人材育成と、感動体験の提供を目指して～ …… 06
TOKYO2020 レガシー／スポーツ団体ガバナンスコード …… 08
SDGs について …… 09
ダイヤモンドコンテンツ …… 10

Athletics for Wellness
- ウェルネス陸上の実現 …… 12
- 参加機会の提供 …… 13
- ファン拡大 …… 14
- ファミリーサービス …… 15

Developing Human Resources
- 人材育成 …… 16
- 指導者養成 …… 17
- アスリート育成 …… 18
- 情報活用 …… 19

World Standard Athletes
- 国際競技力向上 …… 20
- トップアスリート強化 …… 21
- トップコーチ養成 …… 22
- サポート強化 …… 23

Underlying Contents
- 基盤コンテンツ …… 24
- 競技会運営 …… 25
- 環境整備 …… 26
- マーケティング …… 27
- 組織強化 …… 28

各ビジョンのロードマップ …… 29
アスレティックファミリー拡大に向けて …… 30
各団体との連携 …… 31
JAAF 中長期計画対談企画 …… 32
JAAF REFORM 中長期計画作成ストーリー …… 40
新たなステージへの挑戦に向けて …… 42
Our Power, Our Commitment, and Our Journey

JAAF REFORMを通じ、JAAF VISION 2017を具体化する

2017年に発表した「JAAF VISION 2017」において、国際競技力の向上「トップアスリートが活躍し、国民に夢と希望を与える」、ウェルネス陸上の実現「すべての人がすべてのライフステージにおいて陸上競技を楽しめる環境をつくる」というミッションを掲げ、下記のビジョンを定めました。

JAAF VISION

2028 年に	2040 年に
世界のトップ 8	世界のトップ 3（アジアの NO.1）

入賞の得点合計で争うプレイシングテーブルで、日本は2016年リオオリンピックでは25位。2028年に世界のトップ8、2040年に世界のトップ3（アジアのNo.1）を目指して、アスリートの育成・強化を推進します。

2028 年に	2040 年に
アスレティックファミリー 150 万人	アスレティックファミリー 300 万人

陸上競技・ランニングを楽しんでいる人口を2040年に2,000万人にすることを目指します。そのために、アスレティックファミリー（競技会参加者、審判、指導者）を2028年に150万人に、2040年には300万人に拡大させることを目指します。

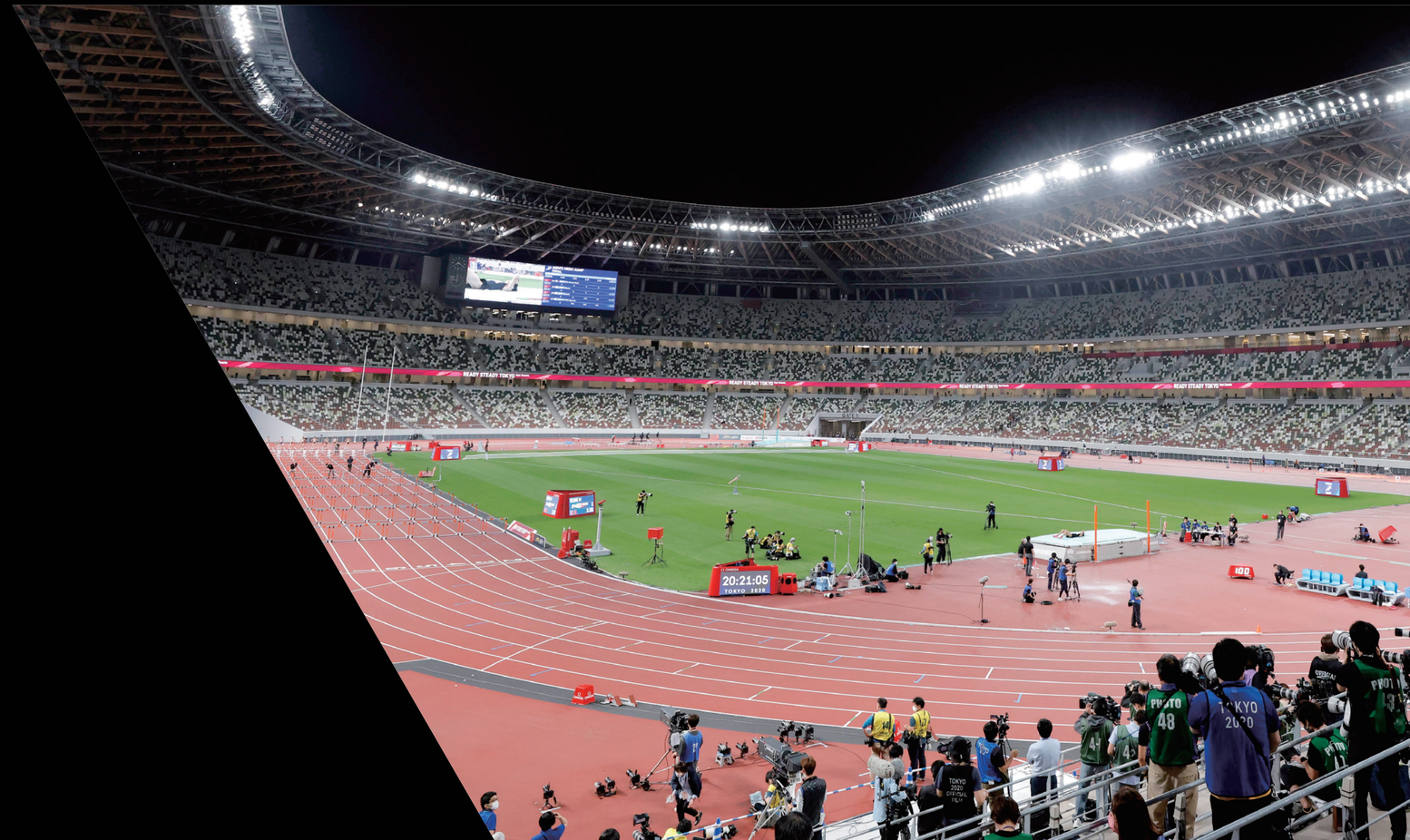
このJAAF VISION 2017をより具体化するため、JAAF REFORMプロジェクトを通じて、新たなステージで挑戦するための中長期計画を策定しました。今後未来に向かって輝き続ける日本の陸上界を持続的に発展していくため、より具体的なアクションプランを掲げ、「未来に輝く人材育成と感動体験の提供」を目指します。

未来に輝く人材育成と、
感動体験の提供を目指して

本連盟が目指すべき方向性を共通認識し、世の中に対して、「陸上」が社会に良い影響を与えられるよう、JAAF REFORMプロジェクトを通じて、多くの人に感動体験を提供し、競技力のみならず、社会で幅広く貢献できる人材を輩出できるよう、「陸上」の社会的価値向上を目指して、今後のあるべき姿を掲げています。
また、本中長期計画では「陸上競技」ではなく、「陸上」と表現しています。今後は競技力や競技志向の観点だけではなく、もっと身近で幅広い「陸上」に親しんでもらうことを理想としています。
ビジョンを掲げることで、陸上に関わる全ての人と「実現したい未来」を共有し、その未来に向かって、一人一人が前向きにやりがいを感じながら、イメージを持って同じ方向に進んでいくことで、日本の陸上界としてのあるべき姿を達成していきたいと考えています。

中長期計画の理念

ビジョン実現のため、その時代や背景にあった項目で再構築をしながら、JAAF VISION達成を目指します。



TOKYO 2020 オリンピックレガシー

Olympic Legacy

TOKYO 2020を継承して

東京2020オリンピックが終了し、大会ビジョンとして掲げられていた「ダイバーシティ＆インクルージョン」をレガシーとして継承するとともに、多様な人々、ジェンダー平等、異なる価値観や能力から新たなイノベーションを生み出し、価値創造につなげていきます。

また、東京2020オリンピックを迎えるまでの道のりや、大会の結果を踏まえ、成功や継続すべき点、また悔しい思いをした部分の改善事項などを振り返り、今後新たに突き進む糧として、人も組織も大きく成長できる機会と捉えながら、新たなステージで挑戦をしていきます。

スポーツ庁 スポーツ団体ガバナンスコード

Governance Code

スポーツ庁は、2019年6月10日に中央競技団体における適切な組織運営を行う上での原則・規範を示したスポーツ団体ガバナンスコードを発表しました。

これは、中央競技団体の業務運営が社会的影響力を有するとともに、国民・社会に対して適切な説明責任と公共性の高い団体として、不祥事の未然防止やスポーツの価値が最大限発揮されるよう、適正なガバナンスの確保を図ることを目的としたものです。

スポーツ団体ガバナンスコード原則1に「組織運営等に関する基本計画を策定、公表」を掲げています。
今後の陸上界の発展と、陸上を通じた社会での役割を果たすことを目的として、本中長期計画を作成しました。

JAAFとSDGs

SDGs 持続可能な開発目標とは

国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて、持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットの中から「陸上」の力を活用し、目標達成に向けて貢献していきます。

「陸上」とSDGs

「陸上」と社会とのかかわり方や課題解決について、本中長期計画を基に、全ての人の健康・教育、ジェンダー平等、公平性の担保、環境保持・資源有効活用、インテグリティ向上等、持続可能性に配慮した運営方針や運営計画も含め、SDGsの目標を達成していきます。

身近なことから始めるSDGs

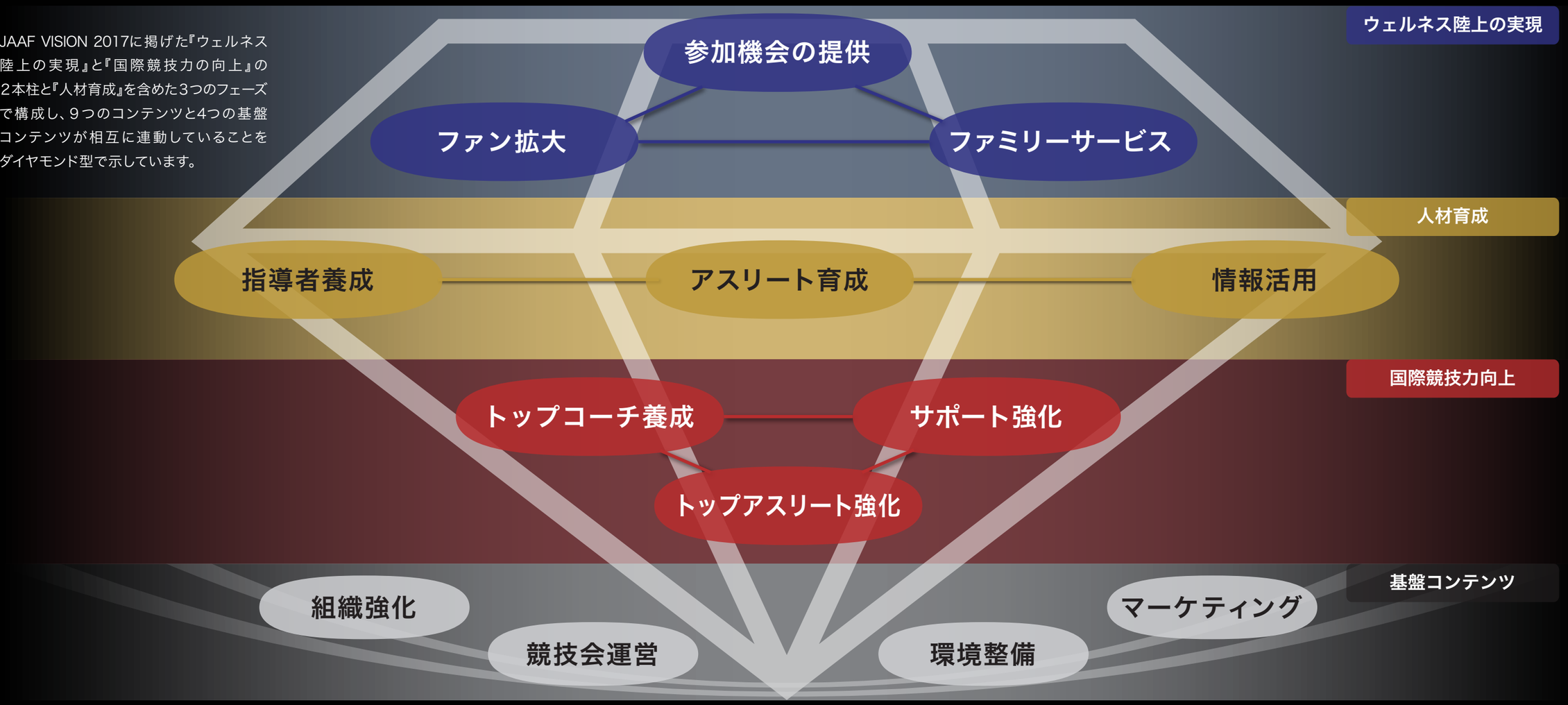
本中長期計画では各コンテンツ別に、17のゴールのうち当てはまる目標を示しています。
大きく難しく考えずに、アスレティックファミリーの皆さんが「陸上」に関わりながら、身近に出来るところから行動できる環境や意識づけをしていきたいと考えています。

JAAF × SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

※上記は、国連が2015年9月25日の総会決議により、国連加盟国が採択した持続可能な開発目標（SDGs）に対する視覚的な認識を高めるために作成した17のアイコンです。

中長期計画における
ダイヤモンドコンテンツ

JAAF VISION 2017に掲げた『ウェルネス陸上の実現』と『国際競技力の向上』の2本柱と『人材育成』を含めた3つのフェーズで構成し、9つのコンテンツと4つの基盤コンテンツが相互に連動していることをダイヤモンド型で示しています。



ウェルネス陸上の実現 フェーズ 01

ウェルネス陸上を通じて、より身近で気軽に「陸上」に触れる機会の環境整備と、皆さんに多くの感動体験をしてもらい、前向きで充実した生活を継続してもらいたいという思いを込めて、重点的なビジョンとして掲げています。また、アスレティックファミリーのための登録制度改革を進め、『するひと・見るひと・支えるひと』の立場に合ったライフログ蓄積や情報提供サービスを充実させていきます。

人材育成 フェーズ 02

アスリートの育成、指導者養成など「人材育成」フェーズをセンターに置き、「陸上」に関わる全ての人が、充実して継続的に「陸上」を楽しめる環境を目指します。アスリートの競技力向上と共に、社会の中で生きるライフスキル向上も重視し、アスリート・指導者の学習機会を充実させます。また、「陸上」をする人が支える側になったり、指導する立場になる等、関わり方の変化も見据え、生涯に渡って主体的に「陸上」に関わり続ける意欲を持った人材を育成します。

国際競技力向上 フェーズ 03

トップアスリートが国際競技会や社会で活躍することで、皆さんに夢や感動を与え、新たに「陸上」に関わりたい人が増えるような好循環を生み出したいと考えています。また、国際競技力向上を目指し、レベルの高いアスリートに対して、より専門的で高度なサポートができるトップコーチの養成やサポート体制を構築します。

基盤コンテンツ

ダイヤモンドを支える基盤コンテンツは、アスレティックファミリーにとって有益な事業・組織を目指して還元できるよう、各コンテンツと相互関係を持たせながら、加盟団体・協力団体の皆様と共に、協力して基盤を強化し、ダイヤモンドを支えていきます。

Athletics for Wellness

ウェルネス陸上の実現

参加機会の提供　ファン拡大　ファミリーサービス

参加機会の提供

TARGET（実現したい未来）

身近で気軽な「陸上」スタイルの確立

ACTION（実行内容）

- 身近な「陸上」を目指したイベント・広場・施設等の環境づくり
- 地域クラブの在り方の提案・サポート
- 全ての年代の人々への「陸上」に関する情報提供の充実

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- 他者と競う「陸上」の楽しさ以外にも、身体を動かす楽しさや自分のペースで活動を継続し、「できること」が増える嬉しさや、「記録」が伸びる喜びなど、「陸上」のたくさんの魅力に共感してもらう。
- これまでの「陸上」の固定観念にとらわれず、より馴染みやすく参加しやすい「陸上」機会の提供を目指す。

MISSION（具体的使命）

だれもが、いつでも、どこでも、身近に「陸上」に関われるよう、イベントや施設・広場等の環境づくりを積極的にサポートします。また、「陸上」に触れる機会として、身近で様々な年代の人々が集う地域クラブの発展を目指し、スポーツの多様性や人々のニーズに合ったクラブのあり方を検討します。
今後、「陸上」の枠組みを越えた指導者の共有や、各年代の人々がスポーツを通じてコミュニケーションの取れる、地域に根差した活動を通じ、社会の課題解決やスポーツの価値向上に貢献していきます。これらを踏まえて、自治体などと協力しながら、誰もが自分に合った「陸上」の情報が得られる仕組みづくりも行います。

SDGs 目標

3 すべての人に健康と福祉を
継続的に体を動かす「陸上」をする機会を提供し、健康増進に寄与します。

15 陸の豊かさも守ろう
自然に配慮し共存した広場・施設等の環境設備を目指します。

17 パートナーシップで目標を達成しよう
全ての人が、身近に「陸上」に接することができるよう、協働していきます。

ファン拡大

TARGET（実現したい未来）

心躍るエキサイティングな感動体験の共有

ACTION（実行内容）

- 選手とファンが触れ合うきっかけや場の提供
- 「陸上」の魅力・過程・ストーリーを見せるコンテンツの展開
- アスレティックファミリー同士のコミュニケーション活性化

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- ありのままの「陸上」の魅力や人々を惹きつけるもの、「陸上」の何に楽しさを感じるのかを見い出し、共有できるコンテンツを充実させ、相互に組み合わせながら活用していく。

MISSION（具体的使命）

「陸上」ファンになってもらう要素は多くあり、今後より一層、新規でファンになってもらうための情報発信や、よりコアなファンになってもらうためのコンテンツ充実を目指します。
また、アスリートがより身近な存在になり、興味を持って応援してもらえる交流の場や、アスレティックファミリー同士のコミュニケーションによる共感や帰属意識を高めていきます。
さらには、「陸上」そのものの魅力・過程・ストーリー等を展開し、他業種とのタイアップなど新たな可能性の創出も見据えながら、少しでも多くの皆さんに感動を提供していきます。

SDGs 目標

- 9 産業と技術革新の基盤をつくろう：コンテンツ充実やコミュニケーション活性化を目指したプラットフォーム整備を行います。
- 10 人や国の不平等をなくそう：全ての人が身近に「陸上」に触れる機会、観る機会を提供します。
- 17 パートナーシップで目標を達成しよう：充実したコンテンツや提供ができるようパートナーと協力していきます。

ファミリーサービス

TARGET（実現したい未来）

生涯にわたる充実したサービス提供

ACTION（実行内容）

- 「陸上」に関わった生涯の活動履歴や、その人に合ったサービスの提供
- 「する・みる・ささえる」人の活発化を後押しできるシステム構築

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- アスレティックファミリーの皆さんが、より満足度の高い充実したライフステージを送ることができるよう、サービスを発展させ、様々な「陸上」の楽しみ方を提供する。

MISSION（具体的使命）

「する・みる・ささえる」人の活動記録、大会検索、ランキング情報、講習会参加、審判履歴、チケット購入履歴などが確認できるプラットフォームの整備を行います。
また、会員それぞれの立場で必要としている情報を、随時提供して共有します。
さらに、する人がみる人に、みる人がささえる人になったりする発展性と、アスレティックファミリー同士の相互コミュニケーションを通じて、繋がる楽しさも実現したいと考えています。

SDGs 目標

- 3 すべての人に健康と福祉を：「陸上」活動を通じて、健康ややりがいを高めるサービスを展開します。
- 5 ジェンダー平等を実現しよう：性別問わず、誰もが充実した活動ができるようサービスを提供します。
- 9 産業をつくろう：充実したプラットフォーム開発・整備を行います。
- 10 人や国の不平等をなくそう：全ての人に、それぞれの立場に合った「陸上」に関わる情報を提供します。

Developing Human Resources

人材育成

指導者養成　アスリート育成　情報活用

指導者養成

TARGET（実現したい未来）

アスリートの未来と可能性を引き出す指導者の養成

ACTION（実行内容）

- 人々に「陸上」の価値、魅力、楽しさを伝え、アスリートの活動意欲を高める指導者の養成及び養成システムの確立
- 指導者が継続的に学習できる環境や情報の提供

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- "アスリートセンタード"の考えのもと、アスリートの意思を尊重しながら、長期的な視点でアスリートの成長や社会的スキルを高められる指導者を養成する。

※アスリートセンタードとは
主役(中心)であるアスリートのために、指導者・家族・ドクター等の支える側(アントラージュ)が連携して、アスリートの気づきや成長を導くコーチングの考え方。

MISSION（具体的使命）

アスリートを支える全ての人々に『競技者育成指針』及び『指導者養成指針』を理解してもらい、「陸上」の特性を踏まえて、アスリートの未来を考え、「陸上」の価値や楽しさを伝えることができる指導者を養成します。全ての指導者がコーチ資格を取得し、指導者自身が、学習、スキルアップを図りながら、安全な活動環境のもと、アスリートの年代や競技レベルに合った質の高い指導が行えるよう、指導者資格制度を整備し、都道府県と連動して、指導者を養成、支援します。

SDGs 目標

- 3 すべての人に健康と福祉を：「陸上」の楽しさを指導し、継続的に身体を動かす意欲を高めます。
- 4 質の高い教育をみんなに：アスリートの将来の可能性を高める指導ができる学習環境を整備します。
- 5 ジェンダー平等を実現しよう：性別問わず指導者の活動意欲を高める仕組みやハラスメント防止に努めます。
- 8 働きがいも経済成長も：指導者としてのやりがいやワークライフバランス向上を目指します。
- 10 人や国の不平等をなくそう：指導者からの差別や贔屓などを無くし、アスリートの活動環境を維持します。
- 16 平和と公正をすべての人に：不正や理不尽の無い、クリーンな「陸上」環境に努めます。

アスリート育成

TARGET（実現したい未来）

社会で輝き続けるアスリートの育成

ACTION（実行内容）

- アスリートが楽しく向上心を持って、継続的に「陸上」に取り組める環境づくり
- アスリートへの情報や資質向上のためのコンテンツやプログラムの提供

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- 「陸上」を自ら意欲的に継続し、楽しさや可能性を広げ、競技力向上と共に社会でも輝き続けるアスリートを育成する。

MISSION（具体的使命）

『競技者育成指針』に基づき、各年代のステージで未来を見据えながら、継続的に楽しい「陸上」との関わりになるような環境づくりを目指します。
また、アスリート自らの意思や考えを的確に伝える力や、ライフスキル向上のためのプログラム・コンテンツ・情報提供を積極的に行います。
「陸上」を通じて、競技力向上はもちろん、競技以外の場面でも、失敗や困難に立ち向かい、自らの能力を最大限生かして、社会で活躍できるアスリートの育成に取り組みます。

SDGs 目標

- 1 貧困をなくそう：相対的な貧困下でも「陸上」に関わる機会を維持できる施策を検討します。
- 4 質の高い教育をみんなに：多種多様な学習コンテンツの展開や情報提供を目指します。
- 5 ジェンダー平等を実現しよう：性別に関係なく、前向きに楽しく「陸上」に取り組める環境づくりをしていきます。
- 10 人や国の不平等をなくそう：アスリートが平等に、未来に向けた可能性を高められる環境にしていきます。
- 16 平和と公正をすべての人に：フェアプレー精神やルールの遵守を徹底し、公正な「陸上」を維持します。

情報活用

TARGET（実現したい未来）

「陸上」の魅力を高める情報活用

ACTION（実行内容）

- 記録・測定・医科学データ等を一括で管理できるデータベースのシステム構築
- データベースを最大限利用した多角的指標に基づいた評価・尺度での分析

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- 記録や測定等のデータベース化を行い、データ推移や多角的指標で比較分析をし、アスリートの可能性や魅力をより一層向上させ、データを活かしたタレント発掘や強化戦略を目指す。

MISSION（具体的使命）

記録や測定等をデータベース化することにより、客観的データによる傾向や可能性など、個々のアスリートに適合した情報分析や評価方法及び指標を最大限活かしていきます。
また、会員情報と連動した記録やデータから、様々な尺度での相対的評価と、自己の成長が分かる絶対的評価により、「陸上」を通じた感動体験が提供できる仕組みも構築します。

SDGs 目標

- 4 質の高い教育をみんなに：分析・比較データを基に、より向上心を高める情報提供をしていきます。
- 9 産業と技術革新の基盤をつくろう：分析方法や精度を高め、より有効な分析技術やシステムを模索します。
- 10 人や国の不平等をなくそう：データを活かして、タレント発掘や強化戦略を公平に行います。
- 16 平和と公正をすべての人に：情報の取り扱いや個人情報保護に努めます。

World Standard Athletes

国際競技力向上

トップコーチ養成　サポート強化　トップアスリート強化

トップアスリート強化

TARGET（実現したい未来）

世界で活躍できるアスリートの育成

ACTION（実行内容）

- トップアスリートの発掘・育成・強化において一貫した国際競技力向上システムの構築
- トップアスリートの意欲や向上心を生み出す強化施策の設計

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- 世界トップクラスの国際競技力を目指した施策を講じると共に、スポーツ界を牽引し、象徴となり得る資質を持ったトップアスリートを育成する。

MISSION（具体的使命）

世界標準の競技力を目指し、強化体制や強化システムを、より効果的にアップデートし、トップアスリートの成長を最大限サポートできる体制を整備します。
また、世界の強豪国と競い合えるトップアスリートを増やすため、発掘・育成・強化に至る施策を再構築し、世界で勝負する意識を高め、国際競技力向上を目指します。
そして、選手強化を意識した大会の仕組みや指導者・トップコーチ養成も含め、各事業と連動させた強化の在り方を、関連団体との連携を図りながら、広い視野を持って作り上げます。

SDGs 目標

- 4 質の高い教育をみんなに：国際競技力や社会的スキル向上を目指した高度なプログラムを提供します。
- 5 ジェンダー平等を実現しよう：性別に関係なく、選抜や代表サポートを行います。
- 10 人や国の不平等をなくそう：全てのアスリートに対して、平等に強化選抜の選出を行います。
- 16 平和と公正をすべての人に：強化施策や強化システムなどの社会規範や透明性を高めていきます。

トップコーチ養成

TARGET（実現したい未来）

世界レベルのコーチ養成システム確立

ACTION（実行内容）

- 高度な指導力と多面的なサポート力を養成する世界標準のコーチシステム構築
- トップアスリートを的確に導くプロデューススキルの高いコーチ養成

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- 国際競技力向上のためのハイパフォーマンスコーチ養成システムを構築し、高度な指導力と、アスリートを多面的にサポートできるトップコーチを養成する。

MISSION（具体的使命）

世界標準のコーチ養成システムを構築するため、高度なプログラムやWorld Athleticsとの連携、トップコーチカテゴリーの明確化を目指します。
そして、世界で活躍できるアスリートの育成をより加速化させ、国際競技力向上に繋げていき、トップコーチのキャリア形成や、海外にも発信できる養成システムを構築します。
また、国際競技力向上のためには多面的なサポートが必要であり、取り巻く環境や的確な情報提供など、マネジメントスキルの高いコーチを養成します。

SDGs 目標

- 4 質の高い教育をみんなに：世界標準の高度な学習プログラムを提供します。
- 5 ジェンダー平等を実現しよう：性別に関係なく、トップコーチを養成します。
- 8 働きがいも経済成長も：トップコーチの地位向上に努め、キャリア形成を促進します。
- 10 人や国の不平等をなくそう：誰もがトップコーチを目指せる開かれた養成システムを構築します。
- 16 平和と公正をすべての人に：インテグリティや規範意識の高いトップコーチを養成します。

サポート強化

TARGET（実現したい未来）

世界トップクラスのサポート体制構築

ACTION（実行内容）

- 専門スタッフ間のネットワーク構築による、高度で安定したサポート体制の整備
- 各スタッフの役割を明確化し、サポートしやすい環境づくりと緻密な連携体制の構築

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- トップアスリートが、高いステージで活躍できるサポート体制を構築するため、専門スタッフとの連携やマネジメント力を強化し、世界に誇れる多面的で緻密なサポートを提供する。

MISSION（具体的使命）

より高い専門知識が必要になる場面で、正しい判断ができるよう、医療・栄養・トレーナー・メンタル・科学・情報分析スタッフ等の専門スタッフによる、円滑なマネジメント体制を整え、好循環に動くように整備します。
また、陸上界に限らず、スポーツ界・他業界との人材交流や繋がりを深め、「陸上」の枠組みを越えた情報収集や人材共有を推進します。

SDGs 目標

- 8 働きがいも経済成長も：役割を明確化し、各分野で最大限サポートできる体制を構築します。
- 10 人や国の不平等をなくそう：トップアスリート全員に、偏りなく、高度で安定したサポートを提供します。
- 16 平和と公正をすべての人に：トップアスリートの個人情報に配慮し、情報管理を徹底します。
- 17 パートナーシップで目標を達成しよう：各専門分野で連携をし、より良い判断や対応ができるように努めます。

Underlying Contents

基盤コンテンツ

組織強化 | マーケティング | 競技会運営 | 環境整備

競技会運営

TARGET（実現したい未来）

一体感ある感動体験の共有

ACTION（実行内容）

- 競技会の事業価値向上と大会カレンダーの最適化
- 魅力的で開催しやすい競技会モデルの形成と運営の効率化

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- 競技会のスケジュールを関連団体と協力して最適化し、アスリートが計画的に参加しやすいカレンダー構成に整える。また、各要素に特化した魅力ある競技会や、運営をより効率化した負担の少ない競技会モデルを構築する。

MISSION（具体的使命）

安心安全な競技会運営のための業務整理や適性人数を今一度整理し、新規審判員育成や継続率の向上も視野に入れながら、審判のモチベーションが高まるような仕組みづくりを行います。
競技会の演出等によって、アスリートや観客の高揚感を生み出し、ライブ配信やテレビ中継などを通じて、みる人に対して感動体験の共有を目指します。

SDGs 目標

- 3 すべての人に健康と福祉を：誰もが参加しやすい大会実施や「陸上」機会提供により、健康増進に寄与します。
- 5 ジェンダー平等を実現しよう：性別関係なく、平等な競技会実施を行います。
- 8 働きがいも経済成長も：大会運営や審判など、充実した従事環境に整えます。
- 10 人や国の不平等をなくそう：アスレティックファミリーが、平等にエントリーや競技会に参加できる環境にします。
- 15 陸の豊かさも守ろう：環境に配慮したグリーンプロジェクトを推進していきます。
- 16 平和と公正をすべての人に：不正や隠ぺいなどが無いようフェアプレー精神を継続します。

環境設備

TARGET（実現したい未来）

アスレティックファミリーが集う拠点整備

ACTION（実行内容）

- 組織的サポートが充実し、地域に根差した「陸上」施設の機能強化
- 誰もが安心して利用できる「陸上」施設や街づくりの制度設計

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- 地域に根差した施設の拠点化を行い、継続的に利用価値のある施設の充実や制度設計、また「陸上」を活かした街づくりを目指す。指導者養成・競技者育成の観点からも新たな可能性や発見が湧き出すよう、意欲的に「陸上」に取り組めるコミュニケーションの場を提供する。

MISSION（具体的使命）

陸上競技場や多目的広場等の制度設計や、「陸上」を通じた地域活性化による街づくりを促進していきます。
気軽に歩ける・走れる場の紹介やプログラム実施等を各自治体と行い、身体を動かすきっかけづくりや「陸上」に魅力を感じ、関わり続ける環境になるよう整備します。
また、競技者育成や指導者養成の観点から、地域に根差した拠点を設置し、地域の実情やニーズに応じた利活用・多種目・多世代・多志向の観点から、社会との繋がりや地域コミュニティの活性化にも寄与していきます。

SDGs 目標

- 8 働きがいも経済成長も：地域拠点に関わる関係者が、前向きにやりがいのある環境整備を行います。
- 15 陸の豊かさも守ろう：環境に配慮し、特長を生かした施設やコースの整備を行います。
- 17 パートナーシップで目標を達成しよう：自治体や関連団体と協力して、「陸上」をする場や機会促進を行います。

マーケティング

TARGET（実現したい未来）

目標実現に向けた協働関係の構築

ACTION（実行内容）

- 「陸上」を通じ、社会に役立つ価値の提供を目指した提案
- パートナーのニーズに寄り添い、共通の目標を持った共創関係を築く

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- 「陸上」がより魅力的な価値を創出できるよう、各種事業やパートナーと連携し、目標の実現や課題解決に向けて、当事者意識をもって取り組み、成果を生み出す。

MISSION（具体的使命）

本連盟事業の目的やコンセプトを明確にしながら、事業自体の価値を高めるために、実現したい未来に沿った形で事業内容・話題性・ストーリー性などに共感を得られるよう、マーケティング活動を通じて積極的に提案していきます。
また、社会に良い影響をもたらすよう、パートナーと同じ目線に立って協働し、「陸上」を通じて、社会に貢献したいと考えています。

SDGs 目標

- 8 働きがいも経済成長も：パートナーとの協働により、新たな価値創造や成長を目指します。
- 9 産業と技術革新の基盤をつくろう：未来に繋がる革新的な提案から、「陸上」の成長促進を目指します。
- 17 パートナーシップで目標を達成しよう：パートナーとの共創関係を築き、社会貢献や課題解決を促進します。

組織強化

TARGET（実現したい未来）

アスレティックファミリーのための組織づくり

ACTION（実行内容）

- 経営基盤を安定させ、組織力向上のためのガバナンス強化と各種規程整備
- アスレティックファミリーを支えるコミュニケーション強化
- 国内外の各種団体との積極的な連携強化

SPIRIT（目指す方向性/精神）

- 様々な社会情勢の変化や期待・要望・課題などに対して、軸を持ちながらも、しなやかさのある対応ができる組織を目指すと共に、高い信頼性を維持する。また、財務基盤やガバナンス力などを維持向上し続け、日本の陸上界が社会的に大きく貢献できる体制を整え、「陸上」全体の価値向上に繋げる。

MISSION（具体的使命）

組織の土台である財政基盤の安定化や各種規程整備、ガバナンス強化やコンプライアンス遵守など、競技団体としての社会的責任や組織力向上を推進していきます。
また、加盟団体・協力団体等の関連団体との定期的な情報共有を行い、コミュニケーションを高めていきます。
さらにWorld AthleticsやAsian Athletics Associationなどの国際団体との連携を深め、本連盟のプレゼンスを向上させ、積極的に友好関係を築いていきます。

SDGs 目標

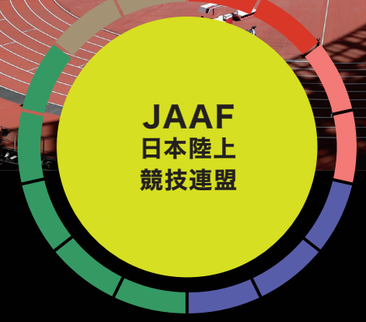
- 4 質の高い教育をみんなに：最新情報を随時発信できるインフォメーションセッションなどの体制強化に努めます。
- 8 働きがいも経済成長も：労働環境の充実や、アスレティックファミリーが前向きに関われる環境整備をしていきます。
- 10 人や国の不平等をなくそう：リスクアセスメントや公平性の観点を重視します。
- 16 平和と公正をすべての人に：ガバナンスコードに遵守し、公正な運営とコンプライアンス強化に努めます。
- 17 パートナーシップで目標を達成しよう：関連団体と密に連携し、先進的な組織運営を目指します。

▼各ビジョンのロードマップ

年		2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028
段階		Phase1		Phase2		Phase3		
ウェルネス陸上の実現								
参加機会の提供	身近な「陸上」を目指した環境づくり							
	地域クラブへの提案・サポート							
	全ての年代への情報提供充実							
ファン拡大	選手と触れ合うきっかけづくり							
	新たな「陸上」コンテンツの展開							
	更なるコミュニケーション活性化							
ファミリーサービス	「陸上」活動活性化のためのシステム構築							
	「陸上」活動履歴にあったサービスの提供							
人材育成								
指導者養成	アスリートの意欲を高める指導者養成・システム確立							
	指導者への学習環境と情報提供							
アスリート育成	楽しく継続的に取り組める環境づくり							
	資質向上のためのコンテンツ提供							
情報活用	データベースシステム構築							
	多角的指標での評価・尺度分析							
国際競技力向上								
トップアスリート強化	高い意欲・向上心を生み出す強化施策							
	一貫した国際競技力向上システムの構築							
トップコーチ養成	高度で多面的なコーチ養成システム構築							
	アスリートを的確に導くトップコーチ養成							
サポート強化	高度で安定したサポート体制の整備							
	サポート環境と緻密な連携体制の構築							
基盤コンテンツ								
組織強化	経営基盤安定と組織力強化に向けた基盤整備							
	国内外の団体との積極的な連携強化							
	ファミリーとの双方向コミュニケーション強化							
競技会運営	競技会事業価値向上と大会カレンダー最適化							
	魅力的ある開催モデル形成と運営効率化							
環境整備	各地域に根差した組織サポートの機能強化							
	安心安全で利用しやすい施設のライセンス設計							
マーケティング	パートナーと共通目標を持った共創関係の構築							
	「陸上」を通じ、社会に役立つ価値の提供							

アスレティックファミリー拡大に向けて

JAAF VISION 2017で掲げた、2028年にアスレティックファミリー150万人、2040年に300万人を目指すため、新たな会員登録システムの構築や、より気軽に「陸上」に触れることが出来る体制を整え、アスレティックファミリーの拡大を目指します。
また、「する人」が「みる人」に、「する人」が「支える人」に、「みる人」が「支える人」等にもなるような相互関係が高まるよう、「陸上」の魅力を幅広く提供していきます。
更に、様々な立場の人と「陸上をつくる」ことや「陸上でつながる」ことなど、柔軟な視点で、「陸上」の価値が高められるような環境づくりもしていきます。



各団体との連携強化

加盟団体／協力団体／他団体との連携について

本中長期計画をより浸透させて達成を目指すためには、加盟団体・協力団体や関連する各団体の理解・協力や協働が必要不可欠であり、同じ方向を目指し、地域や団体の状況や実情に合わせて、柔軟に対応しながら連携を深めていきます。
また、新しいアイデアや知見を取り入れながら、JAAF REFORMを推進するために、国際団体や上部団体・他競技団体などと積極的に交流や情報交換をしていきます。
さらに、関連団体とのコミュニケーションを強化していくために、ネット会議等を利用した情報提供や各団体からの提案・報告等を通じ、相互理解・情報アップデートを定期的に実施しながら、ビジョン達成を目指します。

ワールドアスレティックス（WA）	アジア陸上競技連盟（AAA）
日本スポーツ協会	日本オリンピック委員会
47都道府県陸上競技協会	10地域陸上競技協会
各登録団体	日本実業団陸上競技連合
日本学生陸上競技連合	全国高等学校体育連盟
日本中学校体育連盟	日本マスターズ陸上競技連合
日本パラ陸上競技連盟	他競技スポーツ団体

JAAF REFORM
Panel Discussion

新たなステージでのあるべき姿

アスリート代表　為末 大／寺田 明日香

日本陸上競技連盟会長　尾縣 貢

司会　石井 朗生（日本陸上競技連盟 事務局次長 兼 経営企画部長）

日本の陸上界や日本陸上競技連盟は今後、どのように進んで行けばいいだろうか。男子400メートルハードルの日本記録保持者で2001年、2005年の世界選手権銅メダリストの為末大さん、女子100メートルハードルの日本記録保持者で東京2020オリンピック代表の寺田明日香さん、日本陸連の尾縣貢会長の3人に、日本陸連が策定した中長期計画「JAAF REFORM ～新たなステージへの挑戦～」の内容や、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の経験も踏まえながら、意見を交わしていただいた。

400m hurdles

Dai Tamesue

東京2020大会を終えて

一司会：まず、JAAF REFORMの内容について率直に感じられたことお聞かせいただけますか。

寺田：陸上を通して人材を育成するというところが目に留まりました。私もまだ選手をしていますが、若い選手から陸上をやめた後について相談されることがすごく多いです。そこを陸上界全体で考えられれば選手達も安心できるし、陸上のほかの魅力も見つけられるのではないかと思っています。

為末：陸上界の今後についてはっきり定まったことは素晴らしいと思います。引退してみたら、陸上をやってきて良かったと思うことが多いです。一人で自分と向き合いながら競技しているので、自分のことをよく見る、そして誰でも記録、つまり自分を伸ばす可能性があり、楽しめるし、充実感を持てるのです。だから教育的というか、人育てになりがちで少し真面目な競技と言われるかもしれないですけど、そこがすごく良いところだと思いました。

一司会：尾縣会長、今お二人のお話を聞いて、どう思われましたか？

尾縣：若い人たちの意見を尊重しながら次のスポーツ界、陸上界を作らないとスポーツの発展はないと思いますね。2013年に東京オリンピック・パランピックの開催が決まってから、ひたむきに大会に向かってきました。その先が問題だという意識は誰もが持っていましたが、陸上がいち早く現状把握をしながら手を打っていこうと考えながらやってきました。

一司会：東京オリンピック・パラリンピックのビジョンの中に「全ての人が自己ベストを目指し、一人ひとりが互いを認め合い、そして未来に繋げよう」ということがありました。寺田さんは東京オリンピックに出場された経験を将来、自分自身や陸上、スポーツ界などで活かしたいと思ったことはありますか？

寺田：選手としてまず自分の結果を求めてやっていたのですが、ボランティア、運営、陸連の方々など、いろいろな方々に関わっていただいて開催できたオリンピックだとすごく感じたので、たくさんの人々にそういう部分も見てもらいたいと思いました。無観客開催だったのはすごく残念ですが、テレビや報道を通してたくさんの子どもたちに、陸上って楽しそうだなとか、寺田明日香を見て頑張ろうと思ったとか言っていただけた。日本での開催で時差もなく、近くでやっているということもあり、選手とファンの皆さん、子ども達に多くのことを感じてもらえ、距離がすごく縮まっていたのではないでしょうか。ここからどんどん将来へ繋がっていけば良いと思っています。

一司会：為末さんは、大会前にご自身の文章の中で、東京オリンピック・パラリンピックの理念にすごく共感できると書いておられました。

為末：陸上は全部観て、すごく感動しました。何回泣いたかというぐらい。あと今回は世の中から、スポーツの価値は何かという問いかけがすごく多かったですね。テレビに出演した時などに「スポーツの価値は何ですか？なぜ今やるのですか？」という本質的な質問を受け、一生懸命考えるうちに、オリンピック・パラリンピックは、人が生きている力を引き出す大きな装置じゃないかと思いました。国籍を超えて一人一人の人間が一生懸命やっている姿を見ると、観ている人にもそれが伝わって共感する。そういうものが本当の価値なのではないでしょうか。

一司会：尾縣会長は日本オリンピック委員会（JOC）の選手強化本部長でもあり、東京オリンピックでは日本選手団の総監督を務められました。

尾縣：私はコロナ禍の間、オリンピックが開催できるかどうか、開催していいのだろうかと考え、本当に心を痛めながらやっていました。大会開幕前に選手村に入り、ボランティアの人たちが選手の名前を呼びながら「頑張ってください」と声をかけてくださる光景に接して「オリンピックをやっても良いのだ」という気持ちにやっとなりました。
いざ始まって分かったことは、やはりアスリートというのは本当に憧れられる存在なのだということです。例えば寺田さんが頑張っている姿を見て、多くの人達が共感をしたり、特に子育てをしている母親の皆さんはものすごく憧れたりすると思うのです。それは必ずスポーツの参画に繋がる、繋げたいという気持ちが強くなりました。
もう一点は、スポーツは「する」だけのものではないということ。今回は無観客だったので競技場で観るという点は実現しませんでしたが、「支える」というところの大切さを感じました。だから日本陸連としては今後、「する」「観る」「支える」をきっちりとサポートしていこうという気持ちが強くなりました。

為末 大 Dai Tamesue

1978年5月3日生、広島県出身　Deportare Partners 代表
エドモントン2001世界選手権、ヘルシンキ2005世界選手権の400mハードルにおいて、銅メダルを獲得。オリンピックには、2000年シドニー、2004年アテネ、2008年北京の3大会連続出場。400mハードル日本記録保持者。また、一般社団法人アスリートソサエティ代表、新豊洲Brilliaランニングスタジアム館長。

スポーツの価値、陸上の魅力を伝える

一司会：為末さんのお話の中で、オリンピック・パラリンピックは人が生きる力を生み出す装置、という言葉がありました。

為末：オリンピックは、世界平和という大きなテーマを掲げています。僕はアジアの国々に選手の指導に行きますが、例えばラオスは義足の選手が多いのです。それはベトナム戦争に関連したアメリカによる空爆の不発弾が今も埋まっているからで、踏んでしまったり、地面で料理をする際に熱で温めてしまったりして爆発させることで障害者になってしまうのです。一方で、まだわだかまりのようなものもありながら、アメリカのサポートでスポーツを始めるラオスの子どももいます。だからさまざまな国の選手が一緒にプレーをしたり、同じものに取り組んだりするということは、言葉でやるよりも浸透する具合が違うのではないかと思っています。
国籍や性別が違う人々も、一緒に全力で身体を動かしていると、お互いの違いを超えて「要するに走る仲間じゃないか」みたいなものが言語的ではなく、身体的にすごく分かる感じがするのです。今回のオリンピック・パラリンピックは、選手たちが勝ち負けを超えて、同じものを目指した仲間に見えました。

一司会：日本陸連は今までトップの選手の強化、国際競技力の向上に偏りがちだったところもありました。今後はもっと幅広く、楽しく走る、自分で走らなくても観る・支えるなど、さまざまな形で陸上に関わってくれる人を増やしたいと考え、中長期計画でも明確に示しています。

為末：オリンピック・パラリンピックのビジョンで良いと思ったところは、僕みたいなちょっと競技から離れた人間でも役割を見つけられるというところです。僕は外から発信する役割だと思うので、「みんな寄っておいで」ということを伝えられる。そのような形で、陸上でも皆があのビジョンを実践していけば、競技力に関わらず、誰もがファミリーみたいになっていけるのではないかと思います。

寺田：2013年に23歳で一回陸上をやめた後の私の目標が、運動会でぶっちぎるお母さんになるということでした（笑）。大人になっても陸上の大会に出るとなると、トップレベルか、それともマスターズから入るのかという選択肢になってしまう。でも、娘の運動会に参加される方々の様子も見ていると、親の競技で速いところを見せたいお父さんは多い。そういうところにも陸上界として関われると良いのにと思います。運動会で走るとか跳ぶとか投げるというのも、それも陸上なので。最近は選手側からもそういう意識が出ていて、普及イベントを開催している事例が出てきているので、そこも日本陸連と一緒にやっていけたらすごく盛り上がっていくのではないでしょうか。
子どものことを応援する親はたくさんいるけれど、親がスポーツで頑張っているところを子どもが応援するのもすごく良いと思います。うちの場合は私が頑張って、娘と主人が応援してくれます。そこで新しい形で生まれる絆も、陸上をやっていて良かったと思える一つの要素になるかなと感じています。

一司会：中長期計画を組み立てていく過程の議論でも、一回陸上から離れてしまうと戻りにくいという話がありました。身近なところで、ふらっと通りがかりでも参加できるものができると良いなという話もしています。

尾縣：私は今回のオリンピックでほとんどの競技の会場を回りましたけれど、ニュースポーツ、例えばスケートボードでは、外国人選手と本当に和気あいあいと話をしながら、失敗してもまた次のトライをする光景を目の当たりにしました。本当にすごいと思いました。これからは価値も多様化するべきだと思います。皆さんもおっしゃったように、陸上は走って勝って、跳んで競って……だけではなく、人を幸せにしたり健康にしたりする陸上、それもすごく大事だということです。これからは、多様な価値を陸上に持たせることを考えないといけない、そういう活動をしたいと思っています。この中長期計画にも入っています。

一司会：日本の選手はオリンピックでメダルを獲得しても金メダルでなければすごく悔しがったり、「すみませんでした」と言ったりする選手が少なくありません。日本のジュニアの大会でも優勝したのに「目指した記録に届いてない」とあまり喜ばない選手がいます。頑張って努力の成果を発揮した自分をもっと評価していいのに、とも思います。日本の陸上やスポーツの中で、結果にとらわれる雰囲気を感じられる場面はありますか？

為末：それは強いと思いますね。それが、他の人たちより後から始めようとしても始めにくい原因にもなっているので、もっと楽しんでやっても良いと思います。たぶん僕が競技を長くでき、今も陸上を嫌いにならず好きなままでいられるのは、中学校の指導者の「楽しくやれ」という言葉があったから。尾縣会長がおっしゃったような、いろいろな陸上が受け入れられる、というのが大事だと思います。

一司会：寺田さんはラグビーに専念し、外から陸上を見ていた時期もありましたが。

寺田：一度目の時は私もすごく結果主義者で、優勝しても自分の思っていたタイムが出なかったら、悔しさをにじませながら帰っていました。離れてみて、速く走るとか遠くに跳ぶ、遠くに投げるという目標について自分で考え、いろいろな人にも関わっていただいて、様々なアプローチをすることがすごく魅力的で、価値があるのではないかと感じました。その楽しさが分かったので、2018年に28歳で陸上へ戻り、30歳を超えてまだできているのだと思います。楽しい、陸上が好きだということが心の根底にないと、無理して頑張らなきゃいけない。陸上は結果が出るともちろん嬉しいのですが、そこに至る過程がどれだけ魅力的なのかということを伝えられたら良いなと思っています。

人材育成に力点

一司会：中長期計画では「未来に輝く人材育成」という部分を強調しています。決して結果が思うように出なくても、あるいはトップになれなくても、陸上をやっていてすごく良かったと充実感が得られるようにしたい。陸上を通じて得たものを将来に役立て、競技だけでなく社会的にも活躍をする人材を育成したいですし、陸上をそう思ってもらえるスポーツにしたいです。

尾縣：日本陸連が既に取り組んでいることが二点あります。一つは為末さんにもご協力いただいているダイヤモンドアスリート制度。これはただ強いだけではなくて、国際的なリーダーとなる人を養成しようとしています。例えば英語も必要だし、栄養学の教育も必要だし、いろいろな人の話を聞くことも必要だし、そういうことを通してリーダーを育てています。もう一つ、ライフスキルトレーニングプログラムがあるのをご存知ですか？大学生を対象にした、自分の競技力向上に加えて自分のキャリアを確立していくための教育で、陸上をやっていた人が社会に出て社会でもリーダーになることを目指す、というものです。そういう人たちに長く陸上と関わっていただくことで、陸上の価値が向上し、陸上界の発展に繋がるのです。今後もそういう人材をどんどん作っていくということが、我々の今の大きな目標です。そのためには陸上の価値というものを多様に考えていく必要があり、特に指導者はそう考えるべきだと思います。

一司会：為末さんは現役の頃から、社会との繋がりなどへの意識が強かったですね。それは大学生の終わり頃、2001年の世界選手権でメダルを取ったあたりからですか？

為末：だいぶ後ですよ。中学・高校・大学では、もうちょっと社会のことを……と同級生に言われるくらいでしたから。本当に陸上が大きかったのは、自分と向き合わざるを得ないから。例えば僕は、実は継続がすごく苦手で、新しいことをどんどんやりたがるので、練習がバラバラになりがちでそれでよく崩れていきましたが徐々に克服していきました。それで「この人はとても自分をよく分かっている」という印象を周りの人々に持ってもらえたようで、社会との接点が増えていったのです。何か魅力を磨いて外に出ると、興味を持ってもらえて、世界が広がってくるということがあると思うのです。私の最初の種は陸上で、そこから社会に出て、あとは好奇心があったのでちょっとずついろいろと見て、ドタバタしながら失敗をしながら、広げていった感じですね。

一司会：寺田さんも陸上以外、スポーツ以外との繋がりも広げて来られたと思います。その大切さや、今の自分に活きている、繋がっていると感じられることはありますか？

寺田：陸上を一度やめてから、本当にいろいろな方々に助けていただきながら競技をしていたのだということに気付きました。できないことがあってもそれを言う勇気を持っていいというのもやめてから分かりました。昔は人の意見をあまり聞きませんでしたが、陸上を引退した後にラグビーに取り組んだ時期も含めて多くの人と関わることで、いろいろな意見が入ってきます。そのことこそが自分が周囲の人と一緒に成長していける種だと思っています。為末さんもおっしゃったように、自分と向き合いながらも、それぞれの人とコミュニケーションを取っていける、一緒に協力していけるというところがすごく魅力的。その良さをもっと感じてもらえたら嬉しいなと思っています。

一司会：若いうちはなかなかそこに気づけませんし、指導者がそういう発想を持つことを許してくれないこともあると思います。

為末：選手たちが、そういう例や、やはり外と触れた方が良かったよというような話を積極的に始める。それを聞くことで指導者が、そうかもしれないなというふうに変わっていくと思います。僕がすごく思うことは、指導者は勇気を持って選手を手放してみた方が、結果的に良いことが起きるのではないかということ。指導者はきちんと選手をハンドリングして綺麗に仕上げようとするけれど、むしろ選手側を主体にしてボールを渡したほうが良いことが起きる、という成功体験をどれだけ多くの指導者の方が持つか。さらにそういうストーリーが今後、寺田さんのような例で発信されていくのが大事だという気がしますね。

2021年 第32回オリンピック競技大会（東京）

寺田：指導者の方々とお話ししていると、皆さん陸上のことが大好きだなと感じます。陸上が好きだという気持ちは、たぶん指導者の方も選手も一緒だし、結果を出したいという気持ちも同じ。なのに崩れてしまう原因は、お互いのコミュニケーションがうまく取れていないというところにあるのかなと思います。指導者の方が選手からの意見を受け入れる温かさを持ち、選手も自分の思っていることを吐き出す勇気を少し持てたら良いのでは。外から見ていて、陸上は囲まれているというか、縛ってしまうような雰囲気を感じたので、もう少し陸上界全体で変わって行こうという雰囲気があると、もっと盛り上がっていくのではと思います。

一司会：ラグビーは雰囲気が違いますか？

寺田：違いますね。チームが違っても、どういうことをしたらもっと良いアタックができる、ディフェンスができるとか、そういう情報共有があります。ラグビーにはノーサイドという言葉があり、試合が終わった後は対戦相手とやり取りをするので、横の繋がりは指導者も選手もすごく深い、広いと思っています。

一司会：指導者でもある尾縣会長は、今の話を聞いてどう思われましたか？

尾縣：この議論はずいぶん昔から繰り返されています。運動部指導における体罰の問題もクローズアップされてもまだ続いています。我々日本陸連は競技者の育成と同様に指導者の養成に力を入れています。かといって、資格を与えれば良いというものではないので、根本的な部分をどうやって変えていったら良いか、ということをこれから若いアスリート、若い指導者にも聞いていかないといけないと思っています。

寺田 明日香 Asuka Terada

1990年1月14日生、北海道出身 ジャパンクリエイト所属
東京2020オリンピック100mハードルにおいて準決勝進出。ベルリン2009世界選手権に出場、2010年アジア競技大会では5位入賞。2008年から3年連続、及び2021年日本選手権100mハードル優勝。2013年に競技を離れたが、2018年に現役復帰。100mハードル日本記録保持者。

SDGsなど社会的課題

一司会：最近はSDGsのような取り組みが社会的に活発に行われています。陸上やスポーツも社会との繋がり、スポーツ以外の部分とどういう関係を持てるか、どういう貢献ができるかという意識を持ち、きちんと示さないといけないと私たちは考えています。

尾縣：競技の陸上だけではなく、ウェルネス陸上という柱を立てて、多くの人達の幸せであるとか、健康であるとか、ビジネスに繋がるとか、いろいろな観点からやれると思います。その中で社会的な課題を解決していくべきだと考えています。

寺田：例えば私ならママアスリートとしての言葉や姿が、子どもを育てながら競技をする環境について皆さんが社会全体として考えてくださる一つのきっかけになったのではないかと思います。スポーツを通して社会の問題を明確にして、皆さんで考えるのはすごく大きなことですし、議論によってもっと良い社会になっていくというのは、スポーツの大きな価値の一つだと思います。子ども達の遊ぶ環境がどんどん無くなってきている中で、スポーツはお友達もできるし、体も動かせるし、学力にも繋がっていくということがもう少し分かってくると、皆さんスポーツって良いものだなと思ってくださるでしょう。そういう子ども達のこれからの環境も含めて、スポーツの中で考えていければ良いと思います。

為末：新型コロナウイルスの感染が始まったばかりの時期にダイヤモンドアスリート制度のプログラムでコミュニケーションの話をしていて、

例えばもしコロナが広がってオリンピック・パラリンピックが延期になった時にコメントを求められたら、どう話すかを選手にやってもらったのです。その時点では全く仮定の話だったのですが、プログラムで何を考えたかと言うと、まさにスポーツにはどんな価値があるか、スポーツはSDGsのどこに影響を与えているか。だからオリンピック・パラリンピックもやるべき意味がある、開催しましょう、ということでした。
速く走る、遠くに跳ぶ、遠くに投げることの奥に、どんなことを実現したいのか、こんな社会になって欲しいということをぼんやりとでも意識していくことが、将来的なSDGsに繋がるのではないかと思います。私は外交や各国の平和にとても興味がありますが、人それぞれ違うでしょう。
そういう意識はたぶん、選手が勝った時に嬉しいということと同時に、あるいはその後のちょっと落ち着いた時に、「どうして私は競技をしているのか」と説明をする時に出てくるもの。それは選手たちが考え続けることで出てくるものでしょうし、十分考えられていたとしても、言葉にしてはっきり推進しなければならないという気もしますね。
一司会：中長期計画では、日本陸上界として取り組む13項目とSDGsのゴールとの繋がりを例示しています。全国40万人余りの日本陸連登録会員の皆さんにも、自分たちなりに考え、工夫してできることを見つけて取り組んでいただくことで、陸上の価値が上がり、陸上がさらにいろいろなことをできるようになってくるといいなと思っています。
為末：こういうことは、どうしても自分が犠牲を払って貢献するものと思いがちです。でも、それをすることで自分も成長して得るものもあるという好循環が始まると思うので、社会貢献といっても、自分が何か我慢して提供することではないほうが良いですね。その方がどんどん陸上も発展するし、貢献も出来る。

尾縣 貢 Mitsugi Ogata

日本陸上競技連盟 会長
兵庫県・小野高校より1978年筑波大学に入学、現在、筑波大学教授。全日本中学陸上100mハードル、インターハイ110mジュニアハードルのチャンピオン。1981年、1982年、日本選手権十種競技2連覇、1982年アジア競技大会十種競技出場。2011年に本連盟専務理事に就任、2021年に会長となる。また、2019年より日本オリンピック委員会選手強化本部長を務めている。

陸上界への提言

一司会：ご自身の経験や立場を踏まえて、日本の陸上や日本陸連に対して、もっとこうなったら良いなとか、もっとこうして欲しいとか思ったことはありませんか。
寺田：私も小さい時から全国大会を目指して頑張ってきた立場ではありますが、その年代から結果主義になってしまうアスリートやコーチの方々がまだまだいらっしゃいます。それが早く燃え尽きてしまう原因にもなりますし、シニアに上がっても練習に対しての新しい刺激がなかなか入って来ずに、伸び悩んでしまうことにもなりかねない。ジュニアの育成では、その時の結果だけではなくて、選手のその先まで見据えてどう指導していくのかを全体として考えられたら良いなと思います。
私も一回やめた時は子どもに陸上をさせたくないと思ってしまったのですが、今は走るのが楽しいって言ってくれたら嬉しいと思っています。娘はたくさん陸上を観ているのですが、陸上をやるって言ってくれていないですね（笑）。まだ小学一年生なので今後どうなるか分からないですけれども。陸上はすごく楽しそうだとか、トップになったらいろいろな国に行って、いろいろな選手と関わって、いろいろな人たちと協力しながら競技ができるんだなというところなども見てもらいながら、競技の魅力を伝えられたらもっと子ども達が陸上を好きになってくれると思います。
陸上の魅力は、本当に運動、スポーツの原点であることだと思います。サッカーの子もラグビーの子も走り方を教えてくださいって言ってくれるし、そういうすごく良いところも伝わるように、魅力的に見せていただけたら嬉しいです。
為末：僕の考えはまず、決めたことを動くようにすることです。スポーツ団体としてのガバナンスですね。ビジョンを決めるだけでなく、それが浸透することが大事だと思います。外部には陸上出身とか、陸上に関わりたいと思ってくださる人がたくさんいます。ガバナンスが効いていれば、そういう人を巻き込み、力になってもらいやすくもなると思います。
陸上界を外から見ると、小さなことの違いで一つの方向に行かないように感じます。痛い思いをしてでも、新しく変えるべきところは変えないといけない。どこかにしわ寄せがいくこともありますが、長期的には陸上の発展に繋がると思います。小さい違いは乗り越えて、みんなで陸上を発展させようという覚悟があると、きっと変わっていけるのではないでしょうか。
あと、あらゆるスポーツに取り組む子が週に1回は陸上を学べるようにしてほしいですね。陸上を学べば基本的な土台が上がり、すべての競技にとって良いと思うので、他の競技と兼ねやすい形の陸上クラブを全国に広げて、日本全体の健康や体力のレベルを上げるという感じです。それができれば陸上は最大の人口を持つ競技になれると思うのですよ。
そのときにみんながID（個人番号）を持っていて、その ID さえあればスマートフォンでクリックすると、どの陸上の大会にもすぐ参加でき、その記録が自分の生涯にずっと溜まっていって、記録の伸びが見られるようなシステムを作ってください。
一司会：それに近いシステムは既に計画していて、実現に向けて取り組んでいます。
為末：これができたらすごいですね。本当にスポーツを底から支えられると思います。
尾縣：陸上の価値は、全てのスポーツの基本であることとも言えます。陸上からほかのスポーツに行っても良いし、ほかのスポーツから陸上に戻ってきても良いし、双方向という考え方だったのです。まさしく為末さんの言ったことですね。やる価値がありますね、本当に。

一司会：陸上だけでなくどのスポーツの団体も競技人口や登録会員を増やそうとしているのに、子どもや人口は減っている。人を取り合っていたら実現できないので、皆さんにいろいろなスポーツに出入りしてもらってはどうかと考えています。幅広いスポーツの経験を通じて関係や繋がりを広げて楽しんでもらうこともでき、楽しさをたくさん知っている方がきっと幸せだと思います。そして多くの人に陸上に関わり続けてほしいですね。
　お三方にご意見をいただき、今後陸上がどう進んで行けばいいかというヒントをいただきました。為末さんと寺田さんには中長期計画の実現に向けて一緒に協力していただければ幸いです。どうもありがとうございました。

石井 朗生 Akio Ishii

日本陸上競技連盟 事務局次長兼経営企画部長
東京都・桐朋高校を経て、1986年筑波大学に入学。中学～大学院まで陸上部在籍（大学から十種競技）2020年3月毎日新聞退社後、同年6月に本連盟入局。新聞記者時代に数多くのスポーツ取材や記事構成を担当。また、長年陸上競技の審判員としても活躍中。

※出席者の発言の内容や趣旨をより明確に伝えることを目的として、一部、修正、編集、補足説明を施しています。

JAAF REFORM
中長期企画 作成ストーリー

2018年に本連盟中長期計画の検討を開始した「JAAF REFORM」プロジェクト。
途中、新型コロナウイルス感染症による社会状況の変化があった中、多くの会議やディスカッションを経て完成した、「JAAF REFORM」中長期計画作成ストーリーを紹介。

Project Progression

2018

2018年9月

中長期計画作成検討会議を開始

- 各部署役職者を中心に週1回のペースで会議を行い、本連盟の将来のあるべき姿とそのために必要な事項を検討。
- 今後実施すべきアクションプランを出し合い、要素別のグループ分けや、プランの取捨選択。

JAAF VISION コンテンツ構成

ビジョン	概念	ドクトリン	ドクトリン	アクションプラン	担当
Vision1 競技力の向上 (TOPIC-TOPIC)	強化環境	MD-1 組織体制	MP1	選手強化策に対するPDCAの構築 指導者育成のための組織の確立 女子選手の競技力向上 ハイパフォーマンスコーチの育成 ハイパフォーマンスコーチ・ハイパフォーマンスディレクターの育成 ハイパフォーマンスディレクターの育成 ハイパフォーマンスディレクターの育成

新たなステージへの挑戦に向けて

Our Power, Our Commitment, and Our Journey

会長
尾縣 貢

「陸上」には、無限の力があります。トップアスリートの輝かしい活躍は、応援していただいている多くの人々に感動や希望を届けることができます。ウォーキングやジョギングを楽しむことは、仲間との絆を紡いだり、生きがいを創出したり、心身の健康を高めることができ、それぞれのライフステージを充実したものにすることに役立ちます。「競技陸上」と「ウエルネス陸上」、目的に応じたいろいろな「陸上」の取り組み方があります。アスレティックファミリーの皆さん、共に新しい「陸上」を創っていきましょう。

専務理事
風間 明

ワールドアスレティックスが2030年までの中期目標として、ワールドプランを設定しています。本連盟の中長期計画もワールドアスレティックス同様、同じような歩みを持ちながら、世界に発信・紹介をしていきたいと考えています。日本陸上界の更なる発展や充実はもちろん、皆さんそれぞれのライフステージにおいて、「陸上」を通じた満足感のある生活に繋がるよう、「新たなステージへの挑戦」として、皆さんと共により一層陸上の価値を高め、中長期計画を成し得ていきたいと考えています。

事務局長
鈴木 英穂

自国開催のオリンピックも終わり、スポーツ界の変容のスピードが一気に加速すると思われます。スポーツが担う役割を果たして、健康寿命の延伸や、多くの人が心身共に健康でいられる社会の一助となります。そして、当然、世界のトップも目指します。陸上を極める人、楽しむ人、支える人、見る人、皆さんを巻き込んで、ごく当たり前の目標を達成するために、新たな挑戦が始まります。

結びに

JAAF REFORM中長期計画作成にあたり、「皆さんに理解・納得してもらえるよう、わかりやすく端的に表現すること」や「一人一人が自分事として捉えられる内容にし、実行力を持たせること」を意識しました。「陸上」経験の無い方にもイメージしやすい文章にすることや、より現実味のある具体的なプランにすることで、本連盟の方向性を多くの方々に共有し、理解して頂きながら、陸上界がより発展していくことを願っています。また、本中長期計画が今後、社会やスポーツ界・陸上界に変化が生じたり、困難な状況や壁にぶつかったときに、「陸上」の価値、そして本連盟や各団体が行う各事業の意義など、根本に立ち返って考えられる指標になればと思います。

日本陸連概要

正式名称	公益財団法人 日本陸上競技連盟 Japan Association of Athletics Federations
創　立	1925年3月8日
法人認可	1971年4月24日 ※2011年8月1日より公益財団法人に移行
所在地	〒160-0013 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号 JAPAN SPORT OLYMPIC SQUARE 9階 TEL 050-1746-8410(代表電話)

HP	http://www.jaaf.or.jp/
Facebook	https://www.facebook.com/Japan Atheletics
Instagram	https://www.instagram.com/jaaf.official/
Twitter	https://twitter.com/jaaf.official
YouTube	https://www.youtube.com/jaaf

JAAF 中長期計画
REFORM
新たなステージへの挑戦

発行日	2022年2月21日
発　行	公益財団法人日本陸上競技連盟
編集・写真	フォート・キシモト
デザイン	Sync Design α ／ Monji Design
印　刷	ジョイントワークス

ISSN 2436-7834

※本冊子掲載の情報は2022年2月1日現在のものです

本書の一部または全部を著作権に定める範囲を超え、無断で複写、複製、転載することを禁じます。

©2022 Japan Association of Athletics Federations.
All Rights Reserved.
©PHOTO KISHIMOTO 2022